

# 看取りと臨終の民俗

— 石川県吉野谷村の事例から —

國學院大學兼任講師

板橋 春夫

## 一、問題の所在

人は過去と現在において、他人の死からさまざまなことを学びながら現在と未来の自分の死を想像してきた。身近な人を看取することは、悲しい別れではあるが、死と向き合うための大変重要な出会いでもあるといえよう。先立つ人を看取るが、看取った人もいつかは看取られる運命にある。看取りの繰り返しが人間社会の歴史の原点であるといわれる。

近年、この看取りをめぐる変化が生じている。死に臨んだ人への看護という意味で、ターミナルケアの用語が用いられる。看取りターミナルケアについて現代医学はどのように死を迎えさせるかに関して心理的配慮に欠けるといふ指摘がなされている。医療行為が単なる延命ではなく、人生の終わりに際して生活の質を高め、死に臨む上でより望ましい環境を保証するにはどうしたらよいかが課題となっている（近藤 一九九一 二三三）。

本稿では、民俗文化に伝承される看取りと臨終に関する民俗慣行を、石川県石川郡吉野谷村の事例にみることにする。民俗学の死者儀礼研究では、看取りや臨終に関する記述はわずか見られるが、いずれも断片的であり、体系的に

捉えられていない。本稿の目的は、看取りと臨終の具体的事例を提示し、民間に伝承されてきた看取りと臨終をめぐる民俗の特色を浮き彫りにすることにある。

## 二、自宅から離れる死

日本人の「死に場所」は、戦後に大きな変化があった。昭和二十二年（一九四七）の統計によると九〇・八%が在宅死であり、病院死は九・二%と一割にも満たなかった。ちょうど三十年後の昭和五十二年（一九七七）には病院死が五〇・六%になり、在宅死を上回ることになったのである。その後も現在まで病院死の割合は年々高くなっている。その原因は少子化・核家族化、看取りの医療化など、いくつも考えられるが、基本的には医学の進歩がそれを支えているといえよう。

近年の死をめぐる状況には、情緒的な死から科学的な死へという変化が見られる。昔は家族と亡くなっていく人が悲しみを共有するという情緒があった。しかし現在では、人々が現実に死を体験することが極端に少なくなっている。柏木哲夫が教えている大学生一五〇人を対象に調査したところ、肉親の臨終を実際に体験したことのある者は一人もいなかったという。これは死に場所が病院であるためでもある。テレビの中の死が普通になり、劇画やマンガの中で死んだ者は生き返るため、無意識のうちに死者はよみがえると思う人がいるのが実状である。まさに現実の死から劇化された死へ変化しているのである（柏木 一九九五 七一―七二）。

病院死の増加は、人々にとって死の実感を希薄にしたといわれる。今のままでは、死のリアリティは無くなってしまふし、死の尊厳も失われてしまうのではないだろうか。死んだ人に触れるのを気味が悪い、あるいは不潔と思う人が多くなっているというが、それは死を身近に感じなくなったために生じた現象と考えられる。昔は自宅の畳の上

で死ぬことが理想とされたが、現代は自宅を死を迎えるのは少数派である。自宅で枯れ木が倒れるように息を引き取る大往生は、きわめて稀な事例になってしまった。現在、新聞のお悔やみ欄をみると、多くが「病気のため病院で死去」、あるいは具体的に「肺炎のため病院で死去」などと書かれ、病院死が圧倒的に多く、「老衰」の文字はほとんど見られない。現代社会における死のキーワードは「病院」である。山崎章郎『病院で死ぬということ』（主婦の友社、一九九〇）がベストセラーになり、多くの人に読まれたのは記憶に新しい。

### 三、人生儀礼の中の看取り・臨終

看取りと臨終についての研究は、民俗学の隣接科学である社会学や医療人類学などに見るべき成果が多い。それに対し、葬送儀礼などの聞き書きに携わってきた民俗学は、看取り文化に関してほとんど成果を持たない<sup>(1)</sup>。

末期の水、死に水などと称し、近親者が臨終の人の唇を濡らしてやる慣行があつたが、現在は臨終が確認されてから行っている。この末期の水について井之口章次は「こんにちの死に水の慣習は、いずれも息を引きとつた直後に、唇をうるおす程度にとどまっているが、それはいまわの際に病人が水を求めることと関係がありはしないか」と問題提起をし、長崎県の事例として死に際の人が水を飲みたがる「望み水」「病人の願ひ水」を紹介しながら、このような例を一つの集団表象、つまり民俗慣行として認めようとした（井之口 一九五九 三〇二）。木村博も末期の水に関心をもち、民俗学が末期の水に関する報告が少なかつた点について反省を促した。木村によれば、「死に水をとる」という行為は最期の看取りを意味するが、実際には後継者を意味する言葉であつた（木村 一九八九 二二二九）。

また、死ぬとすぐに枕直しをするが、北枕西向きが一般的である。この寝かせ方について、小林梅次は「死者の寝かせ方というよりも重病人の寝かせ方で、北頭西面の考え方も関係がある」と指摘している（小林 一九七六 一

六八)。このほか、臨終の人に山村であれば振り米を聞かせるとか、生米を無理矢理口に入れて食べさせる真似をするなど、米の力によって生き返らせようとする慣行が知られる。

死んでからの習俗としては、高知県の「いとまごい」「暇のやりとり」がある。これは、血縁や近親者が死者に向かつて「後のこたあ、案ずることはないきに、ええ所へ行かんせや」「今日限りで暇をやりなんせよ」などと語りかける習俗で、近親者以外に身内でない近隣の老女がその役目を務める例も少なくないという。報告された事例では、家が栄えるようにと言ったり、死者に家族の病気を持っていくれと頼んだりしている〔桂井 一九八三 一四五―一五二〕。このときの言葉がある程度パターン化している点を考えると、習俗として定着していた時代があったと想像してみる必要があるだろう。

さて、倉石あつ子「嫁のつとめ―看護と看取り―」は、民俗学分野から看取りにアプローチした先駆的論文として注目される。嫁のつとめとされた介護の問題や看取りについて次のように述べる。

ひとたび家に病人などが出た場合には、その介護負担は主婦の肩にどつとのしかかってくる。特に家を継ぐと考えられている長男（家を継ぐのは次男や長女などの場合もあるが）の妻の負担は大きく、「嫁としてのつとめ」という言葉とともに介護するのが当たり前と考えられ、その努めを果たせない場合には家族・親族・近隣の人々から非難の視線と言葉が浴びせられるのが現状である。〔倉石 二〇〇〇 四八〕

老いる両親を誰がみるかという問題に関して、具体的な事例を紹介しながら昔から長男の妻は大変な負担を強いられていたと倉石は指摘した。現実の介護は主婦の肩に大きいのしかかっているのである。近年、「財産は平等に、介護は嫁さんに」などという言葉がささやかれる。戦後の民法が家制度としての家族制度を崩壊させたが、長男の嫁にだけはいまだに戦前の家族制度が残っていることを象徴的という言葉であろう。社会の高齢化が進む現在、誰が介護の主体になるかはきわめて重要な課題である。

かつての「幸福な高齢者像」というのは、孫や家族に囲まれながら生活することであり、高齢者の介護は、家族の基本的な機能の一つであると考えられてきた。しかし、現在は高齢化・少子化が進行中であり、娘は親の面倒から解放されていた時代とは異なり、どの夫も妻も、自ら面倒を見なければならぬという時代が目前に迫っている。しかも少家族化が進む中で、高齢者の介護を家族だけで行う時代ではなくなりつつある。

看取り研究を医療史の立場から押し進めている新村拓は、死の看取りの文化が明治以降に変質したことを指摘する。古代以来、仏教の平生尋常の看護と臨終行儀における看護を骨格とした看取り文化が、明治の廃仏毀釈で仏教離れが起こり、さらに富国強兵・殖産興業策により若者が都会に集められ、核家族化が進む。女性の社会進出も看取りの担い手の変化を促した。また、明治中期以降は各地に近代病院が建ち、新しい看取りの場が設けられた。医療関係者の看取りの場への進出である。家庭看護に勝る専門家の看護の重要性が説かれるようになったという大きな変化もあったという〔新村 一九九八 三〇〇～三二四〕。

#### 四、看取り・臨終の諸相

ここで、死に臨んでどのようなことが行われたかを、石川県石川郡吉野谷村における聞き書きによって具体的に提示していく。調査では、話者の経験した臨終を時間軸に沿って自由に語ってもらい、それを記録することに努めた。テープレコーダーを活用したが、今回は語り口を生かすことはせず、幾分簡略にまとめることにした。これらの事例群の多くは当該地域社会では一般的な事例に属すると思われるが、どの程度民俗として一般化できるかは各地の事例と比較した後でないと明確なことは言えない。

吉野谷村は、石川県南部、白山の北西麓に位置し、手取川沿いに細長く延びた山村である。岐阜県・富山県に接し

約一四三平方キロメートルと広大な面積を有する。急傾斜の山地に一〇の集落がある。最南部に位置する中宮は、戦前は焼き畑が盛んであった。

金沢市寄りの下吉野と白山に一番近い中宮としては雪の降る量が異なる。中宮の最深積雪は平均二・五メートル前後で、昭和五十九年開設の公営スキー場があり、冬季はスキー客でにぎわう。昭和二年（一九二七）の『石川県石川郡誌』によれば「これ等の道路は、冬季四ヶ月間積雪のため車馬の往来殆ど絶え、中宮への往来最困難危険を極め」という状態で、中宮は昭和二十年代までは冬ごもりの生活を余儀なくされていた。昭和二年十二月、金名線が白山下駅まで延長され全線開通した。白山下駅は終点で隣村の鳥越村に位置し、吉野谷村の人々にとっては金名線が鶴来町や金沢市方面へ出る唯一の鉄道であった。しかし、大雪が降ると沿線住民に除雪を無料奉仕で頼まねばならないほどの弱小鉄道で、大雪が降るたびに不通となり、昭和六十二年四月に廃線となった。

戦後、中宮には北陸電力の社宅が建ち、診療所は昭和二十四年（一九四九）に設置された。この診療所には、医師と看護婦が一人ずつ常駐したので医療環境が格段によくなった。診療所の設置前後では医療に関する考え方が大きく異なることが分かる。また、金名線の開通で金沢市の病院へ行くことができるようになった。それ以前は富山の売薬や民間療法に頼る生活であった。このような山間地に生まれ育った人々が持ち伝えた看取りと臨終の諸相を次に紹介する。

(一) 西田チヨさん（大正六年生まれ・中宮）の話

【事例1】 ババ（姑）の死／昭和二十四年／六十六歳

ババ（姑）は、体が弱く畑仕事を一緒にすることはなかった。結核系の病気で昭和二十四年八月三十日、六十六歳で亡くなった。亡くなる一週間ほど前から食事ができなくなっていたので、北陸電力の診療所の先生に毎日診察して

もらっていた。京都からババの次男も見舞いに来た。その日の昼ごろは静かに寝ていたが、それほど長くはないと感じたので、午後五時ごろ、「ばあちゃん、結構なところへお参りさせてもらうんやさかい、念仏忘れんなや」と言ったところ、ババは「ありがとう」とうなずいていた。それからしばらくして亡くなった。いつ来たか（いつ亡くなったか）分からないくらい静かに息を引き取っており、あわてて脈をとったが脈はなかった。

【事例2】 オジジ(舅)の死／昭和三十六年／八十二歳

オジジは昭和三十六年五月二十三日に八十二歳で亡くなった。京都へ行っていたときにおしっこが出なくなったといって三月末に帰ってきた。診察した診療所の先生から、一年は看護するようになるかも知れないと言われたので、ある程度は覚悟していた。診てくれた先生に酒を振る舞うように言われたが、先生は帰るといっているので一升瓶を持たせた。その晩、牛乳が飲みたいというので飲ませた。近くの出作りにオジジの娘が泊まりで来ていたので、たまには遊びに来るように話したところ、夕食後やってきた。オジジは熊の胆をくれと言ったので少し削って飲ませた。しばらくしてもう一度熊の胆が欲しいと言ったが、二度も飲ませると強すぎるので水だけをやった。それから少しすると、オジジが「ちよっこ起こし変えてくれんか」と言った。枕をあげて起こしてやった。そのとき、これは危ないと感じたので、すぐに親戚や近所に連絡した。しかし、家に戻るとオジジは死んでいた。

【事例3】 実母の死／昭和四十年／八十二歳

私の母は自分の息子に向かって「アニキ、ちよっこわれを抱いてくれや」と言った。普段そのようなことを言うことがないので、変なことを言うなと思った。私も母を抱いてやることにした。抱いてやると腕の中で母がかすれるような小さい声で「ナンマイダブツ」と二回唱えた。そしてすぐに息が切れてしまった。私は「ばあちゃん」と大声を出した。昭和四十年二月二十日に八十二歳で亡くなった。

【事例4】 夫の死／昭和五十六年／七十七歳

ソエアイ（夫）は、昭和五十六年七月三十日に七十七歳で亡くなった。亡くなる数年前に軽い脳梗塞を起こしていた。オシメをたくさん用意するなど看護の準備をしていたが、オシメは一枚も使わなかった。五月連休に七十七歳の祝いを子どもや孫たちがしてくれた。医者も往診に来てくれたので安心していった。お茶をくれと言ったのでお茶とお茶菓子を出して畑仕事に行った。お茶碗を持ったまま死んでいた。死に目にあえた人は誰もいなかった。お茶一口飲んで死んだので、果敢な死に方であると思う。

なお、夫は脳梗塞を起こしたときに美しい花畑を歩いていたという。どこまで行っても広い花畑で、こっちに来てはいけないと言っている人がいた。ふっと思つて振り返ったら家族みんながのぞき込んでいた、と話していた。

## （二） 山田伸次さん（大正六年生まれ・木滑新）の話

### 【事例5】 マゴバア（祖母）の死／昭和三年／六十四歳

マゴバアは六十四歳で亡くなった。昭和三年であった。私が十二歳のときで、長く床に伏していたが老衰であった。当時は六十歳を過ぎれば長生きのほうであった。マゴバアは相が変わっていた。よく「眼のガンが上がる」というが、白い眼が出てきて死が間近であることを示していた。昭和初年ころは医者に診てもらうこともなかったもので、そのような予兆を信じる事ができたのであろう。

### 【事例6】 マゴジイ（祖父）の死／昭和六年／？

マゴジイは、ぜんそく持ちであったのでいつも富山の薬を飲んでいた。冬になると医者通いであった。亡くなる前、息子に向かって「トート、だっこしてくれ」といった。病人がだっこしてくれと言うときは死が近い。だっこしてやり背中をなせてやった。だっこをした翌日に亡くなった。昭和六年の初夏のことである。

### 【事例7】 父の死／昭和十九年／数え五十七歳

父は役場の助役をしていた。戦死した兵隊の遺骨を金沢まで迎えに行くことになっていた。風呂がなかったので、たらいに湯を入れて身を清めて出かけた。寒い日であったのでそれが原因で風邪を引いてしまった。昭和十八年十二月末であった。その風邪がもとで金沢の病院に入院した。ようやく治って彼岸ごろ退院するというときに肺炎を起して亡くなった。

【事例8】 母の死／昭和二十九年／数え六十六歳

母は子宮がんで昭和二十九年五月二十一日に亡くなった。前年に長女が入院したので看病のために付き添いをしてきた。腰が痛いというので、いくつもの病院に行ったがなかなか原因が分からなかった。子宮がんと分かったときは手遅れであった。

(三) 野村正博さん（昭和三年生まれ・中宮）の話

【事例9】 父の死／昭和十五年／四十六歳

父は昭和十五年三月十五日、数え四十六歳で亡くなった。私が小学校六年生のときであった。冬になると父は大阪へ賃稼ぎに行った。医者の方夫をしながら薬合わせも任されていたという。医者のところで働いていたので、自分が病気になったときに慰めの言葉を言われても自分は分かっていたようだ。中宮で一か月養生をしていた。冬になってだんだん痛くなってきたので金沢の医者にかかった。兼六園そばで開業していた山田という医師であった。十二月から三月まで医者にかかっていたが、三月一日に医者から「あと十五日で死にます」と言われた。それならと、大雪であったがセイタで背負って家へ戻った。三月十五日に死んだ。知人親戚が寄っており、父は「皆に頼む」と言った。

【事例10】 ジイの死／昭和二十年／九十歳

昭和二十年十二月二十四日に九十歳で亡くなった。当時の九十歳といえたいしものであった。四月の大火にあ

ってすぐ親戚の家にジイを預かってもらった。「明日の朝、早く出かけるさけ、ワラジ頼む」と言った。昔金沢の寺に泊まったころのことを思い出していたのであろう。大火があつてからすっかりジイはぼけてしまった。朝になつたら亡くなつていた。老衰であつた。発電所の社宅の電話を借りて別宮の春木医師に来てくれるように頼んだ。一度かかつていれば死亡診断書はすぐに書いてくれたものである。医者と呼ぶときはもう駄目というときである。

(四) 広瀬太一さん(昭和四年生まれ・中宮)の話

【事例11】 父の死／昭和十三年／？

昭和十三年十月十六日、父は私が数え十歳のときに支那事変で戦死した。

【事例12】 ジジの死／昭和三十二年／八十三歳

昭和三十二年八月十七日に八十三歳で亡くなった。ぼけはなかったが軽い中風であつた。杉の植林が好きでなくなるまで働いていた。亡くなる一週間ほど寝込んでいたが口が渇くというので酒を飲ませてやったらその場で息が切れた。これが「死に水」である。そのときは北陸電力の医者にかかつていたので診てもらつた。

【事例13】 ばあちゃんの死／昭和五十一年／九十六歳

昭和五十一年十二月二十八日の朝早く亡くなった。満九十六歳であつた。少しぼけが出ていた。

(五) 山岸勇さん(昭和三年生まれ・中宮)の話

【事例14】 兄の死／昭和十四年／？

昭和十四年、私が小学六年生のときに支那事変で戦死した。兄とは年が開いていたし、兄は大阪へ奉公に出ているのでほとんど会つた記憶がなかった。母親が悲しんでいたのを覚えている。兄は村葬であつた。

【事例15】 オババの死／昭和二十四年／九十三歳

オババは昭和二十四年一月二十六日に数え九十三歳で亡くなった。嘉永三年生まれという。子どもを十二人産んだ。老衰で枯れ木が朽ち果てるような感じの死であった。つらいとか、痛いとかはまったく無かったようである。一か月はミカンばかり食べていた。今晚あたりが危ないかなと話していたら、本人が「もうねえ」と言っていた。「カホウな死に方やった」「カホウした」などと言い合った。父親がオババを起こしてやったりしていた。死ぬときは足の先から冷たくなってくるものである。

【事例16】 母の死／昭和三十三年／七十歳

昭和三十三年三月二十日に母が亡くなった。七十歳で急性肺炎であった。このときは雪があつて医者が間に合わなかった。鳥越村別宮の春木医師が来たが間に合わなかった。一晚苦しんで死んだ。イキキルときには手を合わせていたが、冷たくなったので絹でできた綿帽子で包んでやった。

【事例17】 養父の死／昭和三十九年／八十一歳

昭和三十九年十二月二十四日に養父が亡くなった。八十一歳で老衰だった。このときは私は金沢へ出かけていて、帰ってきたら亡くなっていた。私の兄たちが亡くなるたびに枕元にいた。カホウな死に方であるという。

【事例18】 養母の死／平成十年／？

平成十年三月二日に養母が亡くなった。きちんと三回食事をしてはいたが、亡くなる前の一週間は食べられなかった。私の娘が来ていて「今晚泊まるわ」ということで娘と孫が看ていた。苦しまずに亡くなった。村人から「ケナルイ死に方や」とうらやましがられた。

(六) 古田辰三郎さん(大正七年生まれ・中宮)の話

【事例19】 妹の死／昭和二十一年／十五歳

昭和二十一年四月二十八日、一番下の妹が亡くなった。元々病弱な子であった。十五歳であった。病院に通っていたが、当時はお金がかかるので、一か月に一遍くらいしか通えなかった。自宅で亡くなった。

【事例20】 妹の死／昭和二十一年／十八歳

一番下の妹が亡くなったので金沢にいたすぐ下の妹が呼ばれて家に帰ってきた。この妹は、葬式を出した後、家の周りにあったコバの山に登っていて腹部を強く打った。腹が痛いと言っていたので鶴来町の病院へ行った。入院して手術をしたが手遅れで亡くなってしまった。病院から連絡があつて白山下から電車に乗ったが着いたのは夕方であった。一番下の妹が亡くなって二十日ほどで、十八歳で亡くなった。

【事例21】 トシヨリババ（祖母）の死／昭和十二年／八十六歳

昭和十二年四月十二日にトシヨリババ（祖母）が亡くなった。夢みたいに死んだのを覚えている。すーっつと息が切れるようであった。八十六歳であった。

【事例22】 父の死／昭和四十六年／九十二歳

昭和四十六年一月十八日、父が亡くなった。盲腸になったとき、九十歳を越えているので手術できるかどうか話題になったが、あまりに元気なので亡くなる前年十月に手術した。手術の日は歩いて病院へ行った。しかし、手術後はあまり良くなりなく、「家に行こう、行こう」と帰りがたつたので、医師は病院を出ることに反対であったが、ある程度強引に家へ帰ってきた。そして直に九十二歳で亡くなったので、周りの人は「カホウ」したと言っていた。

【事例23】 母の死／？／九十七歳

母は九十七歳で亡くなった。昼飯を食べて夕方静かに亡くなった。大根をこいでいたら「ばあちゃんが具合が悪くなった」と家族が呼びに来たので飛んで帰った。そのときにはもう息が切れていた。ローソクがぼつんと消えたよう

であった。

(七) 森芳次郎さん(大正十生まれ・上吉野)の話

【事例24】 祖父の死／昭和十二年／七十六歳

私は十六歳のときに京都へ奉公に行っていた。祖父三太郎が危篤だと奉公先に電報が入ったので急ぎよ家に帰った。電車に乗っている間に亡くなったのだろう。死に目にあえなかった。当時とすれば祖父は長生きであった。昔は具合が悪くなっても医者に行くことはなかった。

【事例25】 父の死／昭和十五年／四十六歳

父与三吉は胃がんで亡くなった。馬車引きをしていたが酒が好きでよく飲んでいて。胃がんと診断され、旅館にいて医者に往診してもらっていて旅館で死んだ。当時は病院へ入院するよりも旅館のほうが安かった。財産のある家は病院へ入院した。私の母が看病していた。最後のときは目を落として「おまえはヨシやな」ともうろうとしながら私の顔を見ていた。特に苦しんだりはしなかった。

【事例26】 妻の死／昭和三十年／二十五歳

妻保子は病気で死んだ。農家の出身であったが銀行勤めであった。金沢に入院していたが、いよいよ死ぬときには予感があるのか、「もういいわ、枕をはずしてください」と言った。「もうだめだからシャバに出られない」という。女の子がいたが、この子は姉にやってくれと言った。これは私が後妻をもらいやすいようにという配慮から言った言葉だと思う。このほかに田んぼのことを気にしながら死んだ。

【事例27】 母の死／昭和五十三年／八十一歳

死ぬ前二年ほど痴ほうになってしまった。金沢の特別養護老人ホームに行ったが、歩けなくなって家に帰ってきた。

一か月ほどして亡くなった。最後の日は納戸で寝ていたが、座敷に来てご飯を食べた。昼に「この小鯛の汁はうまい」と言った後、ふーっと倒れた。十二月二十三日であった。

(八) 山岸愛子さん(大正三年生まれ・下吉野)の話

【事例28】 オジジ(舅)の死/昭和二十一年/七十六歳

私のオジジは昭和二十一年四月二十六日、七十六歳で亡くなった。心臓が悪くて一か月ほど寝込んだ。すーっと引いていった。ババが付き添っていたが、たまたま昼食で私と交代になったときに息を引き取った。私が食べてからオババに代わった。オジジのそばにいたら、オジジが「南無阿弥陀仏」と手を合わせて唱えながら汗をかいていた。じきに息を引き取った。

【事例29】 姑の死/昭和?年/八十八歳

私の姑は八十八歳で死んだ。当時としては長生きであった。「キツイ」人であった。流行風邪を引いて十日ほど寝込んだ。おなかが痛いというのでさすってやった。昔は冬になると、富山県の城端(じょうはな)などからタビソウ(旅僧)がやってきた。お参りが盛んであった。タビソウに参ってもらって昼の座と夜の座を努めてもらっていた。近所の老婆たちがお参りに来てくれて、見舞いをしながら、オババのおなかをさすってやった。ちょうどそのときにオババは目を落とした。オババも痛みをこらえながら手を合わせて亡くなった。亡くなることを「目を落とす」と表現する。

#### 四、死の身体的表象と看取り作法

聞き書きに応じてくれた話者たちは、死者の命日を聞くと即座に回答してくれた。それは大変な驚きであった。吉野谷村は浄土真宗地帯であり、浄土真宗の信仰を持つ人々は、肉親の祥月命日にシウウジン（精進）といって、その日に肉魚類を食べない習慣を持つ。そのために祥月命日を正確に覚えていたのである。死んだ肉親が人々にとつてきわめて身近な存在であるという鮮烈な印象を受けたものである。

また、一般に浄土真宗は俗信を嫌うといわれるが、聞き書き資料の中には、生まれ変わりの伝承など、俗信と思われるものも多数含まれていた。昭和初期には富山の薬を用いたり、長く床についているなどの例があり、自宅療養が主であった。戦時中になると、交通事情も若干よくなり、金沢市の病院へ通院する人が出てくる。入院すると多額のお金がかかるので病院の近くに下宿して治療をするという形態をとっている。中宮では北陸電力の診療所が戦後にできたが、その恩恵は計り知れないものがあつた。診療所の医師が常に人々の治療に当たっていたのである。もちろん、それでもお金がかかるため富山の薬などに頼っていたことは聞き書きから明らかである。

事例を見ていくと、いくつかの共通項が見出せる。まずは死を表す語彙と死の身体的表象である。呼吸が停止する、瞳孔が開く、心臓が停止する、というのが古くからの死の判定基準であつた。それを裏付けるかのように吉野谷村の民俗慣行でも呼吸・瞳孔については大変重要なものと捉えている。

まず、「アイがなくなる」という表現がある。これは「アイ（間）がないぞ」「もう息のアイがねえがなつた」などと使われる。アイというのは、息をする間合いを指しており、分かりやすく言えば息をしなくなつたということである。息をしなくなつたからじきに「いま参つた」という。この場合の「いま参つた」とは、あの世に参ることである。死にそんな人を「いま参るぞ」というが、そのときにはすぐに手を合わせて数珠をかけてやる。長患いをしている人が抱いてくれと言うときも、もうアイがないといわれている。また、「イキキル」という表現が使われる。この場合の「イキキル」は、息が静かに間延びしてくる状態をいう。「イキキル」とは「仏の所へいま参つた」という意味で

もある。

次に「ガン（目）を落とす」ということがある。亡くなることを「ガンを落とす」という。ガンの落ちた人に「結構なところ、参らせてもらうたんね。間違いないぞね」という。日ごろからお参りしているような信心深いおばあさんに向かって語りかける言葉であった。一方、若死にしたときには「えとしや」という。かわいそうという意味である。また、死ぬことを「舌落ちした」ともいうが、死ぬと自然に舌が落ちる。

心臓が動いているか止まったかについては、民俗では取り立てて伝承がないことに気づく。心臓が動いているかどうかよりも息をしているかどうか、目が平常かどうかということに注意していたことであろう。

さらに注目したいのは、死に臨む人の多くが黒い便を排出するという。吉野谷村では赤子が生まれてから一番最初にする胎便をカンババ・カナバと呼んでいる。黒色の胎便である。死んでからもカンババをすするという。生まれるときは力を入れて生まれてくるし、死んでいくときは力を入れるくらい一生懸命に気張るのでおなかの便が出るのだからという。死ぬときと生まれるときは同じようである。看護をしているときに「カナバこいたし、もうだめや」と死の判定を下すような言い方をしている。

そして、死の看取り作法として、吉野谷村に伝承されてきた方法は、抱いてやる・病人を起こす・枕をはずす、といった三つが主なものであり、実際に行われてきた。死にゆく人を起こしたり抱いたりすると死期を早めるといわれるが、自ら望むことであり、それを息子たちが行うことに意義がある。

死にそうになると、近い身内が交代で抱いてやるが、抱いてやると苦しまずに息切れやすいという。【事例2】のように「ちよっこ起こし変えてくれんか」というのは枕を上げて起こすことである。【事例3】では「アニキ、ちよっこわれを抱いてくれや」といい、【事例6】では「トート、だっこしてくれ」という。言われた子どもたちは一瞬驚くそうであるが、人は生まれたときに戻るといふ理解をしている。なお、【事例26】は「もういいわ、枕をはずし

てください」とある。枕をはずすという言葉は大変意味が深いと言える。

死んだ人に対し、「あの人はカホウ（果報）した」「カホウな死に方」という表現を使う。この場合の「カホウ」は楽な死に方をした、というほどの意味であり、「あの人はカホウな人やった」という言い方は、幸せの良い死に方をした人に使われ、長患いをした人には使わない。もちろん死者の遺族に向かつて直接用いる言葉ではない。ただし、喪家への挨拶で「カホウした。お前もたいそうやった」というような言い方でねぎらうことがある。年とつて亡くなった場合でない「カホウしたな」とは言わない。八十歳を過ぎて死ねばこれは幸せ者であつたという。このようなときにはお礼の返事として「長い間、かわいがつてもうてありがとうございました」という。

## 五、死のサインとしての中なおり現象

民俗学的に注目したいものとして中なおり現象がある。これは末期の患者が一時的に小康を得て、睡眠・食欲・心理状態のやや持ち直す現象で、「中なおり」と呼ばれる。「広辞苑」で「中なおり」を引くと「長い病気で死ぬ直前に一時治るように見えること。なかびより」とある。そして「なかびより」を調べると、漢字にすると「中日和」で「①雨の降り続く中途にちよつと晴れること。②長病で死ぬ少し前にちよつと治るように見えること。」とある。

この中なおり現象は、回復の兆しではなく死のサインであるといわれる。この臨終の一步手前で起こる現象は、点滴・酸素吸入・薬物療法だけでなく、心理的な原因によつても起こるとされる。具体的には、家族がよく面倒をみて励ました、あまり来ない家族や親戚・知人が来て励ました、主治医が熱意をもつて診療した、担当の看護師が真剣に看護した、などである。この中なおり現象は江戸時代の『俚諺集覧』に「中日より長病の死なんとする前に癒る状あるを云、又、中なほりとも云」とある〔池見 一九九七 一三四～一三五〕。

吉野谷村では、この中なおり現象について「ちよっこエエメを見せる」という言い方をしている。<sup>(2)</sup> 寝込んでいた人が遠くの親戚が見舞いに来ると元氣そうな様子を見せることがあるが、直に死んでしまうという。楽そうな風を見せることである。床についていて、もう駄目だという人でも病状が楽そうに見えるときがあるもので、こういう状況を「エエメを見せる」という。「エエメ」を見せるのは亡くなる一週間前くらいである。

中宮のある人は、「エエメを見せる」という言葉を使うときは、病院を退院した人の場合であり、「エエメを見せる」の「メ」は「ミ」の訛であり、本来は「身」であろうといい、「エエ」は「良い」、つまり健康な身体を見せるという意味ではないかと説明してくれた。少し寝込んでいると「エエメ見せて亡くなった」という言い方をする。エエメというのは、健康な体を見せることであつた。同じ吉野谷村には「ヤマイヌケ」という言葉がある。これは病がすっかり良くなったようになる状態をいう。いつも痛いところばかりだつた人が、すっかり痛みが取れたようになる。病が抜けるという意味であらう。

## 六、まとめと課題

石川県吉野谷村では、死に臨む人を抱き上げたり、抱く慣行があつた。すべての人が抱いてもらうというのではないが、かなり多くの事例が認められた。起こすこともあつたが、これは伊豆大島で臨終間近の人を「起こす」「立てる」という慣行に類似している〔木村 一九八九 八九〕。この習慣を報告した木村博は、安楽死を考える上で貴重な資料としているが、臨終の人をいかにして苦痛をやわらげるか、その処置をどうするかといった問題を考えさせる。村人が生死の判定を管轄していた時代の痕跡とみることもできる〔板橋 一九九八 三七〕。また、自宅から病院へ移行する時期も明らかになりつつある。国民健康保険をはじめ、医療体制の充実など、国の施策にも十分目配りしつつ、

吉野谷村における看取りや臨終のありさまがどれだけ普遍性があるのか、これから検証されねばならない。

立川昭二は『臨死のまなざし』で、夏目漱石や石川啄木らの作家が死に臨む様子を詳しく記している（立川一九九三）。ここでは病人の看病・看取りをする人は必ずしも主婦ではない。具体的には夫であったり妹であったり、あるいは専門の看護人であったりする。波平恵美子も、看病は女性の仕事という固定観念は古くからのものではないという重大な指摘をしている（波平一九九六 一八一―一八二）。嫁のつとめとしての介護は意外と新しいことが想像できる。さらに具体的な調査と検証を進めていきたいと思う。

新村拓「死を看取る」は、神奈川県相模原市橋本の相沢日記を利用して看取り文化に言及し、臨終看護に対する人々の不安や恐れが感じられないのは、死が生活や人生の中にしつかりと組み込まれているからであると指摘する。在宅死が望まれながらなかなか実現しないのは、容体の急変にどのように対処したらよいか、どのように看取るのかといった死の看取りに対する家族の不安があるからだという。戦前には在宅における死の看取りは九割を越えていたが、戦後になると死の看取り文化が急速に消え去ろうとしている。現代人は、さまざまな形の看病の技術を失ってしまい、死んでいく人と生き残る人との関係が変わってしまったともいわれる（新村一九九九 三〇―五一）。生命が終わろうとするその瞬間が臨終であるが、わが国では仏教の看取りが源流『往生要集』に見られ、臨終を中心とした看取り文化のあり方がそこには描かれている（長谷川ほか一九九三 四二）。

いままで死に臨む人々がどのような行動をとったかはほとんど注意されてこなかった。死に臨み、各人が個別の対応をしているが、そこに法則性あるいは共通性が見出せないだろうか。たとえば、臨終間近の人に対して悲しんでいるだけでなく、葬式の手配を打ち合わせするのが現実であろう。核家族化が進むと、悲しむ人と葬式を執行する人が同一になってくる。人々はこの段階で覚悟を決めるのか。それは暗黙の諦めにもつながるものである。蛸島は「死に行く病人を看護しながら、しかるべき段階で覚悟を決め、親族を呼び集め、さらには隣室で声をひそめながら葬儀の

段取りについての相談を始めるのである。沖永良部島では、病人の脚が水っぽく腫れるのが覚悟を決める時であるという」と述べている〔蛸島 一九九八 一五二〕。このような事例をさらに追加していくことで、民俗学は臨終や看取りに多大な貢献ができるのではないか。

死の民俗慣行で最も欠けているのはプロセスとしての死を見つめることである。死の過程を見ていくことは、ある意味では老いにつきあうことでもある。老いや死につきあうことが少ないと、どうしても人間に対するいとおしさが欠落しがちになる。現代の日本では、死と老いを日常化していく訓練が必要かも知れない。人生儀礼の中で看取りを見ていく視点について、宗教学者の脇本平也は次のような興味深い指摘をしている。

人が生きる一生とは、小さな別れ、小さな死の連続であり、かつまた、小さな出会い、小さな再生の連続なのである。これを象徴的にドラマ化したものが数々の人生儀礼にほかならず、したがって人生儀礼は、参加する当事者が意識しているかいないかは別として、死と再生への準備教育の場という意味を持つ。少し強調していえば、人は人生儀礼の度毎に、ドラマを演じつつ己の死と再生について自習すべきだ、ということになるわけである〔脇本 一九九七 一一七―一一八〕。

至言である。脇本の言うように、私たちは祖父母や両親あるいは知人たちの死を間近に見ながら、人生を送り、最後には自分自身が死に至る。死の学習をするために人生儀礼はある、と考えてみよう。すると看取りや臨終に関して民俗学の果たすべき役割が多いことに気づくのである。病气や死の過程は、民俗学でも積極的に研究を進めていくべき分野の一つである。観念ではなく、具体的な事例群の中に重要な要素が潜んでいる。私たちは話者の語りに耳を傾ける必要がある。個別的な物語の中に大きなテーマが隠されているに違いない。これからも儀礼と儀礼の間に見え隠れしている人々の感性を汲み上げることが課題としていきたい。

(1) 管見ながら、社会学分野では、『死の社会学』や『若波講座現代社会学』一四卷（病と医療の社会学）には看取りに關して有益な論考が載る。株本千鶴は「看病と死別の物語—ガンで亡くなったある中年女性の死をめぐる—」で死の受容などの問題に触れている（株本 二〇〇一）。若林一美は、人々は死ぬために病院に入るようになり、死が住み慣れた家で家族に見守られながら迎えるものではなくって、近代的設備の整った病院で訓練された専門家集団に臨終まで看取られるようになったことを指摘している。特に死別による喪失感について考察した（若林 一九九六 二〇四）。

中川米造も、「死にゆく者」という論文で病院における死について論じている。特に病院死が増加して死んでいく過程が長期化したためにぼつくり信仰が新しく流行したと報告している（中川 一九九六 一九七）。

(2) 群馬県伊勢崎市では、この中なおり現象を「ヨナオシ（世直し）」と呼んでいる。もう一回生き返ることだという。死にそうな人が急に元気になって最後のお別れをするためにご飯を食べたり、話をしたりすることもヨナオシと呼ぶ。

### 《参考文献》

- 池見澄隆 一九九七 『増補改訂中世の精神世界—死と救済—』 人文書院
- 板橋春夫 一九九八 「急病人搬送の民俗—生死の狭間における対応—」 『都市民俗研究』 四号 都市民俗学研究会
- 井之口章次 一九九五 「葬式」 大間知篤三ほか編 『日本民俗学大系』 四卷 平凡社
- 柏木哲夫 一九九五 『死を学ぶ—最期の日々を輝いて—』 有斐閣
- 桂井和雄 一九八三 『土佐の海風』（桂井和雄土佐民俗選集三卷） 高知新聞社
- 株本千鶴 二〇〇一 「看病と死別の物語—ガンで亡くなったある中年女性の死をめぐる—」 副田義也編 『死の社会学』 岩波書店

木村博 一九八九 『死——仏教と民俗——』 名著出版

倉石あつ子 二〇〇〇 「嫁のつとめ——看護と看取り——」『フォーラム』一八号 跡見学園女子大学文学部文化学会

小林梅次 一九七六 「葬礼」高崎正秀・池田弥三郎・牧田茂編『日本民俗学の視点』一卷 日本書籍

近藤功行 一九九一 「しぬ—生きることと死ぬこと」山本慶裕・元田州彦編『ライフロング・ソシオロジー』 東海大学出版会

版会

新村拓 一九九八 『医療化社会の文化誌』 法政大学出版局

新村拓 一九九九 「死を看取る」新谷尚紀編『死後の環境』 昭和堂

新村拓 二〇〇一 『在宅死の時代——近代日本のターミナルケア——』 法政大学出版局

蛸島直 一九九八 「病氣と死」『講座日本の民俗学』二卷（身体と心性の民俗） 雄山閣出版

立川昭二 一九九三 『臨死のまなざし』 新潮社

中川米造 一九九六 「死にゆく者」『現代社会学14（病と医療の社会学）』 岩波書店

長谷川匡俊ほか 一九九三 『臨終行儀——日本的ターミナルケアの原点——』 北辰堂

波平恵美子 一九九六 『いのちの文化人類学』 新潮社

若林一美 一九九六 「死を看取る者たち」『岩波講座現代社会学』一四卷（病と医療の社会学） 岩波書店

脇本平也 一九九七 『死の比較宗教学』 岩波書店